

## うるち玄米1等級比率90%以上達成に向けて 適正穂肥と丁寧な水管理による後期栄養確保を！

### ここがポイント！！

- 1 生育診断に基づいた適期・適量の穂肥
- 2 丁寧な水管理による後期栄養の確保
- 3 発生実態に合った適切な病害虫防除

### 1 穂肥施用時期、施用量のめやす

穂肥は幼穂形成期から登熟期間の栄養状態を良好に保ち、高品質米を確保するために必要である。一方で、不適切な時期、量の施用は倒伏の助長や品質・食味の低下を招くため、生育診断に基づいた施用を行うことが重要となる。

- (1) 穂肥施用に当たっては、表1を参照する。有機質由来窒素が50%以上の肥料を使用する場合、施用時期を2日程度早める。
- (2) 出穂期は気象条件により変動することもある。そのため、6月20以降発行される普及指導センターの稲作速報を参考に、必ず幼穂長を確認し、適期に穂肥を施用する。

表1 主要品種の穂肥施用のめやす（平坦地）

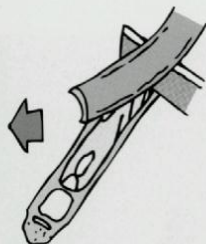
品種名	穂肥散布時期（出穂前日数）		合計窒素量 (kg/10a)
	1回目	2回目	
新潟次郎	25～23	14	6
ゆきん子舞	25～23	14	5～7
こしいぶき	23	14	2～3
五百万石	20	12	1～2
わたぼうし	22～20	12～10	2～3
コシヒカリ	18～15	10	1～3
こがねもち	18～15	10	1～3
新之助	21～18	12～10	2

【参考】幼穂長の確認方法

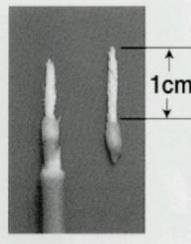
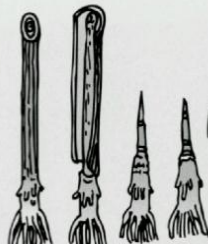
表2 出穂前日数と幼穂長の関係

#### 【幼穂の長さを確認する】

〈その1 カッターなどで割る〉



〈その2 葉鞘をむく〉



出穂前日数 (日)	幼穂長 (cm)
24	0.1
20	0.2
18	0.5～1.0
12	4.0～6.0

## 2 穂肥施用時のポイント

### (1) 早生品種

1回目は、収量確保のため適期を逃さずに施用する。2回目は、品質確保のため1回目穂肥の10日後頃に確実に施用する。

### (2) コシヒカリ

#### ア 分施施肥体系

- ・1回目は、出穂18～15日前の施用を基本とする。ただし、生育診断（草丈と葉色値）に基づき施用時期・施用量を調節する。

表3 出穂前18日の生育のめやす

診断項目		基準値
草丈 (cm)		75
葉色値	SPAD	32～33程度
	葉色板	4.2程度

草丈、葉色とも基準値以下 → 基準量を適期に施用  
草丈基準値以下、葉色基準値より濃い → 葉色の低下を待ち施用を判断  
草丈基準値以上、葉色基準値より淡い → 葉色ムラを直す程度に施用  
草丈、葉色とも基準値以上 → 施用しない

- ・2回目は、出穂10日前に確実に施用する。2回目を施用しなかったり、施用しても葉色が低下し続けている場合、出穂期まで葉色を維持できるかを診断し、施肥量を決定する。
- ・2回目施用後も葉色が低下する場合は3回目（出穂3日前までに窒素成分で1kg/10a程度）を施用する。

#### イ 一発基肥体系

出穂期の葉色値が32～33を下回ると予想される場合、出穂10日前頃までに追加の穂肥を施用する。

### (3) 新之助

- ・肥効が安定しないため、有機質100%肥料は使用しない。
- ・出穂21～18日前と12～10日前に施用する。施用量は1回当たり窒素成分で1kg/10aとし、合計2kg/10aの施用をめやすとする。ただし、栄養凋落が予想される場合は、1回当たり1.5kg/10aまでをめやすに施肥量を調整する。
- ・出穂期の葉色が濃いと、玄米タンパク質含有率が高くなり食味が低下するので、葉色に注意して2回目の施用量を調整する。
- ・一発基肥体系の場合、幼穂形成期以降葉色が低下しても、その後回復するので、窒素の追肥は行わない。ただし、異常高温時において栄養凋落が予想される場合は、最低限の栄養状態を確保するために追肥を検討する。

## 3 今後の水管理

水稻は収穫されるまで、根から土壤中の窒素を吸収し続ける。気象条件や水稻の生育に適した丁寧な水管理を実施し、根の活力を維持して後期栄養を確保することにより、収量・品質の向上を図る。

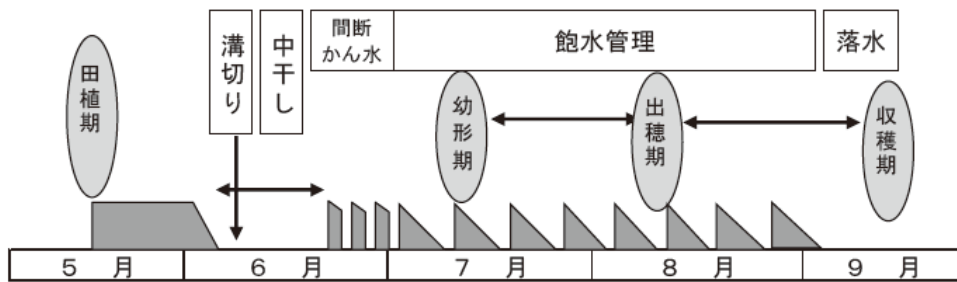


図1 水管理のイメージ

- (1) 幼穂形成期以降から出穂 25 日後までは飽水管理\*を継続し、それ以降を落水時期のめやすとする。
- (2) 穂肥施用時は、肥効を高めるため湛水管理とする。
- (3) 異常高温や強風フェーンとなる場合は、事前に速やかに湛水して、稲体の障害の発生を防ぐ。また、高温下での長期間にわたる湛水は、根腐れの発生につながるので、こまめなかん水を行う。
- (4) 登熟期間が高温で経過する場合、出穂 30 日後までかん水する。また、地域のかん水期間の終期に湛水するなど、できる限り遅くまで土壌水分を保持する。
- (5) 暗渠栓は、出穂 25 日後以降収穫までの期間開ける。

\*飽水管理：ほ場の排水口を閉じて止水し、自然に水が減って田面に水がなくなり、溝や足跡の底に水が溜まっている箇所がみられるようになったら再びかん水する管理法。

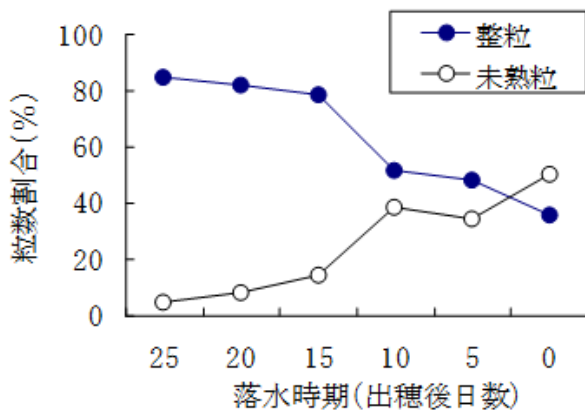


図2 落水時期と玄米品質の関係

落水時期が早いほど、未熟粒が増加し、玄米品質が低下する。

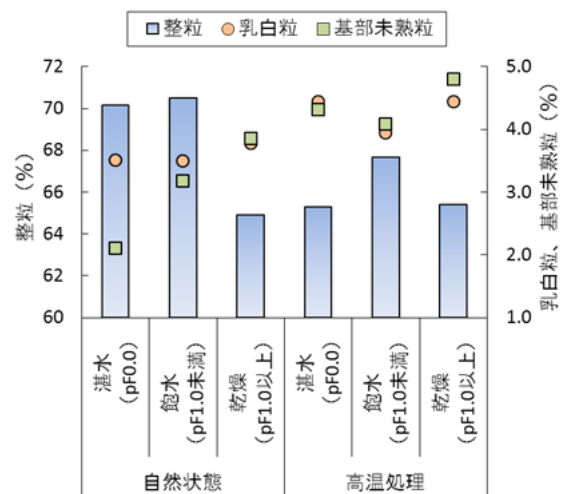


図3 登熟期の水管理と品質の関係

飽水管理を行うことにより、整粒歩合を高めることができる。

## 4 病虫害防除

地域の発生予察情報を活用しながら、発生に応じた適切な防除を行う。また、水田からの散布農薬の流出を防ぐため、散布後における水管理を徹底する。

- (1) いもち病
  - ・コシヒカリ BL 以外の品種は、葉いもちを発見したら直ちに防除する。
  - ・新之助は葉いもち、穂いもちの防除を必ず行う。

- ・新之助において、予防防除を行っても葉いもちを十分に抑えられない場合は、追加防除を行う。また、葉いもちの発生が多い(上位葉に病斑が容易に見つけられる)場合、穂いもちの防除回数を2回とする。

(2) 紋枯病

- ・早生品種、分けつの多い品種、前年に多発生したほ場で発生しやすいため、ほ場をよく観察し、発生を認めた場合は遅れないように防除する。
- ・粉剤・液剤は、株元の葉鞘に薬剤が届くように丁寧に散布する。

(3) 墨黒穂病

- ・わたぼうし、および前年に多発生したほ場で発生しやすいため予防防除を行う。
- ・汚損玄米の発生を防ぐため、発病したほ場の粃は無発病ほ場の粃と別に収穫、乾燥、調製する。

(4) ごま葉枯れ病

- ・毎年多発するほ場は、予防防除を行う。
- ・土壌条件や栄養条件により発病が大きく左右されるため、秋落ちさせないように穂肥を施用し、後期栄養を確保する。また、鉄やマンガンを含む資材を施用し、計画的に土づくりを行う。

(5) 斑点米カメムシ類

- ・雑草の種子が結実しない間隔(3~4週間)で農道や畦畔の除草を行いカメムシ類の密度を低く抑えるとともに、適期に防除を行う。
- ・地域の一斉草刈りは、6月中下旬と7月中下旬の2回行う。ただし、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるため水稻の出穂直前の草刈りはしない。
- ・水稻の出穂後も、イネ科雑草が繁茂しないように草刈りを実施する。